
FAIRY TAIL ~魔法と創造と竜~

サンダースター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL

〈魔法と創造と竜〉

【Nコード】

N7558Y

【作者名】

サンダースター

【あらすじ】

主人公・**魔野 無龍**はどこにでもいる普通の高校2年生だった。

彼は「FAIRY TAIL」が大好きで、新しいコミックスが出るとその日に買うほどのファンでもある。

ところが、ひよんな事から「FAIRY TAIL」の世界に迷い込んでしまう……

「FAIRY TAIL」のおなじみのキャラはもちろん、オリキヤラやオリジナルストーリーも！

魔野 無龍と「FAIRY TAIL」の仲間が織り成すバトルフ

アンタジー！

プロローグ

『今日からテストか・・・ねみい・・・』
俺は魔野 無龍。

どこにでもいるごく普通の高校2年生だ。

「無龍く早くしないと学校、遅れるよ。」

こいつは未導 来夢。

俺の幼馴染で、マガジンやジャンプなどを愛読している。

『おはよう。』

「おはよう！」

『昨日、テスト勉強したか？』

「うん、ばっちり！」

『そういや、今日FAIRY TAILの発売日だったっけ

？』

「そうだよ。」

『やっべ、ちよつと先、学校行っててくれ！俺、本屋行って

から行くわ。じゃ！』

「分かった。」

〈商店街 本屋〉

『ふう。FAIRY TAIL最新刊ゲットしたぜ〜！』

そっぴや、何か忘れてるような・・・

『やっべー！あと10分で校門が閉まる〜！』

俺は全速力で走った。

「まもなく・・・時は満ちる。」

何だ？今の奴？時は満ちた、とか言ってたような・・・

というより、後5分?!急げ!

〈学校 2年A組〉

『ぎりぎりセーフ・・・』

「後10秒遅れてたら、大変な事になってたね。」

「よし、全員座れー！これから、前期中間テストを始める。」

〜3時間後〜

『はあ〜、テスト終わった〜。』

「前期の中間テストとは思えないような内容だったね。」

〜30分後〜

『ふう、やっぱり1番自分の家は落ち着くな〜。そーいや、今日買ったFAIRY TAIL最新刊読んで無かったな』

。読むか。』

〜夕方 PM 6:30〜

『飯も食ったし、風呂も入ったし、今日はもう見たいテレビも無いし・・・寝るか。』

〜その夜〜

ん、何か変な音がするな・・・

窓なんて、開けてないし・・・一体何だ

『!!--!』

何だ？あれは？あんなもん家の前に無かったぞ。

(ピカッ)

うわ！

っ!!一体なんだったんだ？

また、明日もテストなんだし・・・寝るか

〜朝〜

『う〜ん、良く寝・・・え?』

この風景・・・どっかで・・・

まさか・・・ここは、ハルジオンの街!

という事は・・・ここはFAIRY TAILの世界?!!

一体何がどうなってんだ?

キャラ紹介

魔野 無龍 年齢17歳 使用魔法 鉄の造形魔法
まの むりゅう アイアンメイク

雷竜の滅竜魔法 ??? (現時点では不明)

備考

高校に通うごく普通の高校生だったが、夜に謎の光を見て、寝て起きたら、「FAIRY

TAIL」

の世界にいた。基本的には来夢と行動をとるにする。

雷竜の滅竜魔法を主軸に戦う。

来夢 年齢17歳 使用魔法 念導波
みでつ らいむ サイコネシス

霧 星霊魔法

備考

無龍と同じく、ごく普通の高校生だったが、「FAIRY

TAIL」の世界に迷い込む。

その経緯は不明。また、この世界の文字をある程度読める。

黄道十二門の鍵は持っていないが、銀河系9惑星という謎の

鍵を持

っている。現時点では天王星、土星、海王星の鍵を持つ。た

だし、1日1回しか使え

ないため、

基本は念導波を中心に戦う。

第1話 出会い

ハルジオン 駅

「あ……あの……お客様……だ……大丈夫ですか？」

「あい、いつもの事なので」

ん……あれは……ハッピー？

という事は……今は第1話の初めの部分という事になる

な。

もう少し様子を見ておくか……あれ？確か、このままだと・

「無理！！！！もう二度と列車には乗らん……うぷ」

「情報が確かならこの街に火竜サラマンダーがいるハズだよ、行こ」

「ちょ……ちよつと休ませて……」

「うんうん」

「あ」

「！」

「出発しちゃった」

「た……す……け……て……」

やっぱり……ここは助けたほうがいいかもな……よし

「なあ、今、発車した電車の方向分かるか？」

「分かるよ、というよりあんた誰？」

「俺は、魔野無龍まのむねりゅうだ。」

「おいら、ハッピー、よろしくね。」

『じゃ、急いで追いかけよう。』

「うん」

ハルジオン 街

ここはどこなんだろう？

あんまり、見たことない風景だし……

あの娘に聞いてみよう

「あの〜」

「ん？何？」

「ここって、どこなんですか？」

「ここはハルジオンよ」

ハルジオン？！！

ということは・・・私、「FAIRYTAIL」の世界に
来ちゃったわけ？

まさか・・・この娘・・・

「ルーシイですか？」

「え？そうだけど・・・あんた誰？」

「あ、私、未導来夢みどうらいむです。」

「よろしくね、来夢らいむ。あたし・・・」

「ルーシイ・ハートフィリアですよね？」

「?!！何で知ってんの!？」

あれ・・・何で私・・・こんな事・・・言ったんだろう・・・

しかも、自然に・・・

「まあ、そんなことは置いといて」

「置くな!」

「しばらく、一諸にいない？私、この辺の事あまり知らない

し・・・

「ん〜、まあいいわ。ただし!」

「ただし？」

「さっきのことは誰にも言わないですよ!」

「分かった。」

「じゃ、行きましょ。」

第2話 始まり

「ハルジオン まほうショップ
魔法店」

「えー!!?この街って魔法屋一軒しかないの?」

「ええ・・・元々、魔法より漁業が盛んな街ですからね。

街の者も魔法を使えるのは

いましてこの店もほぼ、旅の魔導士専門店ですわ」

「あーあ・・・無駄足だったかしらねえ」

「まあまあ、そんな事無いかもしれませんよ」

「まあまあそう言わずに見てってくださいな、新商品だって
ちゃんとそろってますよ」

「例えば?」

「女の子に人気なのは色替カラーズの魔法かな、その日の気分に合わせて

服の色をチェンジってね」

「持ってるし」

「あたしは門ゲートの鍵の強力なやつ探してるの」

「門ゲートかあめずらしいねえ」

「あ、白ホワイト子犬ドギー!!!」

「そんなのぜんぜん強力じゃないよ」

「いーのいーの、探してたんだあー」

「でも、門ゲートの鍵って、高いんじゃない?」

「いくら?」

「2万ジュエル」

「お・い・く・ら・か・し・ら?」

「だから2万ジュエル」

「本当はおいくらかしら?ステキなおじさま」

「北の駅」

「いたいた、ナツ」

『大丈夫か？』

「おー．．．ハッピー．．．ん？．．．お前誰だ？」

バタツ

「大丈夫、ナツ？」

『安心しろ、気を失ってるだけだ。』

「そう．．．ありがとう無龍。^{むりゅう}」

『じゃ、早くナツを列車からおろそう。でないとな、このまま
気を失つたままだ。』

「だね。」

『それに、ハルジオンに用があるんだろ？』

「うん、火竜^{サラマンダー}を探してるんだ。」

『じゃ、俺も一諸に行くわ。いいだろ？』

「あい！人数は多いほうがいいしね。」

ピクッ

「あ、ナツ」

「やっと、列車から降りられた．．．つか、お前誰だ？」

『俺はM「無龍^{むりゅう}だよ。』

「そうか．．．ありがとな、無龍^{むりゅう}。オレはナツ・ドラグニルだ、
よろしくな！！」

『よろしくな、ナツ。』

「よし、行くぞハッピー！！」

「あい！」

（ハルジオン 街中）

「ちえつ、1000Jしかまけてくれなかったー、あたしの
色気は

1000J^{ジュエル}かー！ーっ！！！！」

「ものにやつあたりするのは良くないよ、ルーシィ。」

「でも、たった1000Jよ！！1・0・0・0・0・0・0・0！！」^{ジュエル}

「人によるんですよそんなの。」

「そんなのってあんたねえ．．．！ ？ なにかしら」

「さあ？」

「この街に有名な魔導士様が来てるんですって」

サラマンダー
「火竜様よーっ」

サラマンダー
「火竜!!!？」

「そうみたいだね」

「あ・あの店じゃ買えない火の魔法を操るっていう・・・この街にいるの!？」

へえ〜すごい人気ねえ、かつこいいのかしら」

「人気でかつこよくても、あんまり期待しないほうがいいんじゃない？」

まあ、こっちは正体がわかるからいいんだけどね・・・
大丈夫かな？

第3話 ナツとルーシイ

ハルジオン 教会 横道

「ナツ、大丈夫か？さつきから元気ないけど。」

「だつてよく、列車には2回も乗っちゃまし」

「ナツ乗り物弱いもんね」

「ハラは減ったし……」

「うちらお金ないもんね」

「確かに、それは元気なくなるわな……」

「なあハッピー火竜サラマンダーってのはイグニールの事だよなあ」

「うん火の竜なんてイグニールしか思い当たらないよね」

「だよな」

「へえ、イグニールってナツにとって大事な人なんだね」

「やつと見つけた！ちよつと元気になってきたぞ！」

「あい」

「……」

「ホラ！！噂うわさをすればなんたらつて！！」

「あい！！！！」

ハルジオン 教会前

「（な……な……なに？このドキドキは！！？）

ちよ……ちよつと！！！！」

「ははつまいったな、これじゃ、歩けないよ」

「（あたしってばどうしちやったのよっ！！！！）」

「ルーシイ、ルーシイってば！！」

だめだ……反応しないよ……

あの男、確かプロミネンス「紅天のボラ」だつたっけ？

確か、魅了チャームの指輪をどこかにつけてたような……

あ！ボラがルーシイの方を見た！

「（はうう！！！！有名な魔導士だから？だからこんなにド

キドキするの…!?!?」

「イグニール!!イグニール!!!!」

「(これってもしかしてあたし・・」

「イグニール!!!!!!」

第4話 謎の魔法(まほう)店(ショップ)(前書き)

やっと、主要キャラ出てきた・・・

第4話 謎の魔法(まほう)店(ショップ)

「!」

「誰だオマエ(汗)」

「!!!!」

サラマンダー
「火竜と言えば、わかるかね？」

「はやつ」

「ちよつ、ナツ待ってよ」

「あれ?この声、どこかで・・・」

「!」

「来夢!?!」

「無龍!?!」

「お前、何でこんな所に?」

「無龍こそ、何でこんな所にいるわけ?」

「てか、場所を変えよう。動きづらくてしょうがない」

「うん。」

「無龍、どこに行くの?」

「あ、ハッピー!知り合いと会ったから、ちよつと向こうに行ってくる」

「あいさ、ナツにも伝えとくよ。」

「今の猫って、もしかしてハッピー?」

「そうだけど・・・細かい話は後!移動しよう。」

「なら、あのお店なんてどう?」

「あれ?ちよつと待てよ・・・この街に魔法店まほうショップは一軒しかないはず、

「・・・まあとりあえず行くか・・・」

「ハルジオン 教会前」

「ちよつとアンタ失礼じゃない?」

「お」

「そうよー!!火竜様はすっごい魔導士なのよ」

「お」

「あやまりなさいよ」

「なんだオマエら」

「まあまあ、その辺にしておきたまえ、彼とて悪気があった訳じゃないんだからね」

「やさし〜」

「あ〜ん」

キユツ キユキユ キユツ

「僕のサインだ。友達に自慢じまんするといい。」

「キヤー」

「いいな〜」

「いらん」

「何なのよアンタ!?!」

「どっか行きなさい」

「うごっつ」

「人違いだったね」

ハルジオン 謎の魔法店まほうのマジック

「とりあえず、お前何で、ここにいるんだ?」

「えーと・・・確か何が、家の前であって、それが光って、気がついたら

ここに・・・」

「それって、もしかして、夜中の0時ごろか?!」

「え・・・う、うん。多分・・・」

「0時ごろに、家の前に謎の物体がいて、光を見て、この世界に来た・・・」

「何でだろう?」

ん?何か今、触れたような・・・

え?これ・・・

「100万ジュエル??!」

「無龍、だめだよー、人のお金盗んじや〜」

「いやいや（汗）、盗むかよ、ポケットの中にあつたんだよ」
「とりあえず、ここで服とか使えそつな物を買おうよ」

「お前、つい数秒前まで盗んだお金って言つて無かつたけ？」

「ねえ、これなんてどう？」

「っ！何だ？すごく邪悪な何かを感じるんだが・・・」

「とりあえず、振つとけば？無龍。」

「（なぜ、素振り感覚・・・）」

「早く、早く！！」

「ったく・・・」

持ったかんじ特に異常は・・・無いな

とりあえず、戻すか・・・

あれ？戻せない？・・・というより、手首になんか、ドク

口のマークが・・・

「それは、魔剣？レオパルド。それを持った者は死ぬまで

その剣を持たなければならぬ」

「あんたは、一体誰だ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7558y/>

FAIRY TAIL ~魔法と創造と竜~

2011年12月29日14時48分発行